



妖怪寝坊



川崎ゆきお

「寝坊って何でしょう」妖怪博士付きの編集者が聞く。

「朝寝坊の、あの寝坊かね」

「そうです」

「寝過ごしたんだろう」

「しかし、坊って何ですか」

「坊やだろう」

「ああ、でも女子でも朝寝坊しましたって、言いますよねえ」

「まあ、言葉とはそんなものじゃ、そこに意味はない」

「寝坊って妖怪がいそうですね」

「そう来ると言うておった」

「はい」

「どんな妖怪なのかな」

「朝寝坊させる妖怪です」

「それより、寝過ごしたとき、誰もが寝坊になるではないか」

「だから、寝坊させる妖怪なのです」

「じゃ、寝坊は何処におる」

「寝過ごした人が寝坊です」

「その人が寝坊かい」

「しばらくは」

「それで、いつから寝坊ではなくなる」

「それはまあ、大体が遅刻と関係しますねえ。寝過ごして会社へ行き、寝坊したとなりますが、これは最後の言い訳で、寝坊など理由にすると駄目でしょ。友達相手なら構わないですが、寝坊することは弛んでいることですからねえ。責任感がないとか、生活態度が乱れているとか、そっちを見られます。だから、遅刻の理由で寝坊は駄目です。そのため、別の理由を考えます。あまりにも寝過ごしすぎて、一寸した遅刻にならない場合、休みます。朝起きたら風邪で熱があつて、とか」

「では寝坊は禁じ手か」

「はい、寝過ごしを理由にしますと、お寝坊さんになります」

「お稲荷さんのようなものじゃな」

「そうです。（お）と（さん）が付きます。これはキャラがそのときだけ、妖怪お寝坊さんになるのです。坊やですよ。男も女も、老いも若きも坊やです。子供ですよ。このレベルはかなり下です。一人前の大人じゃない状態として扱われます」

「しかし、誰でも寝坊するじゃろ」

「しますが、それは情けないことです。仕事上のミスじゃないのです。もっと原始的と言いますか」

「それで妖怪はどうなった」

「そこは博士がまとめて下さい」

「しかし、寝坊は寝坊だろ。寝過ごしに気付いた瞬間寝坊になる。すぐに対策を考えるのじゃないのかね」

「対策ですか」

「急げば間に合うかもしれぬと思い、顔を洗わないで家を出て駅まで全速力で走る」

「その範囲で済めばいいのですがね」

「だから、対策を考えるのじゃ」

「そうですねえ。朝寝坊以外の理由を考えますねえ。間に合わないとなると、遅刻の理由を考えます。僕も何パターンか持っています。いつも使うのは熱があるです。これも使いすぎると身体が弱いと思われまますから多用出来ません。僕の場合編集者ですから、出勤する前に原稿の催促で寄ってました……も使えます。それも使えない場合は、出勤中のトラブルです。そのあたりは全部嘘なので、苦しいですが、寝坊よりはましです」

「だから、本人が一瞬にして寝坊になり、怪しげな理由を考えるあたりが妖怪っぽいのが、そうじゃなく、寝坊という妖怪がおり、それが寝坊をさせたとも考えられる」

「その寝坊は何処にいるのですか」

「知らぬわ」

「ご存じない」

「じゃ、君は何処にいると思う」

「夢の中じゃないですか」

「そうかもしれんおう」

「そうですね。寝坊は寝ていることと関係しますよね。だから睡眠と夢とは関係が深い」

「しかし、遅刻の理由として、妖怪寝坊にやられましたとは言えんじゃろ」

「言えません」

「だったら妖怪の仕業に持ち込めん」

「そうですねえ。じゃ、やはり寝過ごした状態が寝坊で、一瞬妖怪寝坊になり、ドタバタするのでしょうねえ」

「だから会社で、朝、しばらくはお寝坊さんと呼ばれる」

「はい、そうです。だからそう呼ばれたくない。だから、寝坊を理由にしたくないのです。隠します。これは」

「私はいくら寝坊しても、あまり関係はないぞ」

「博士は会社へ行ってませんから」

「しかし」

「何でしょう」

「よく眠れるのは有り難い話なのじゃがなあ」

「博士は不眠症ですか」

「そうではないが、余分に寝ると得をしたような気になる」

「あ、はい」

了